

わ かる と 快 感 !

Z会ナビ

さんすう 算数

りか 理科

れきし 歴史

ちり 地理

お 題

お米を作っているのにお米を 食べない?

(東京大学 2003年 日本史)

「Z会ナビ」が

Webサイト

でも読めます!



Z会おとナビ新聞

検索

これまでの内容も掲載しています!

1878年の報告書を見ると、全国の農村・山村の米の消費量はすべての食料の3分の1にも及んでいません。兵士や都市からやってくる人が多くなると、米の消費量は次第に増えていきますが、それでも、明治時代には、基本的には農民は特別な行事がある日以外にはまだ米を食べていなかったといえます。

明治時代の農村の人々は、なぜ都市の人々ほど米を食べていなかったのか、説明しなさい。

現在は毎日のように食べるお米ですが、明治時代の農村の人々は、結婚式などの特別な時にしかお米を食べなかったそうです。なぜそのようなことになっていたのでしょうか?

お米を作っているのに食べられない

問題文をよく読むと、「都市から人がやってくるようになると、米の消費量が増えていった」とあります。つまり、もともと農村に住んでいる人々には、普段から米を食べるという習慣がそもそもなかったのです。

明治時代の前の江戸時代でも、農村の人々はアワやヒエなどの雑穀を主に食べていました。農村で作られるお米は、都市にいた武士や町人が食べていたのです。

なぜ、自分たちで作ったものを、自分たちで食べられないのでしょうか? その秘密は、税金の仕組みにありました。



イラスト：瑞木匠

お米＝お金

不思議な税金の仕組み

江戸時代、農村の人たちはその地域を治める領主に「年貢」という税金を払っていました。年貢は米で支払われ、領主はそれを食べたり、お金が必要な時には売ったりしていました。しかし、年によって収穫量がかわり、価値も変わってしまう米は、領主の収入源として少し不安定であるという面がありました。

明治時代になり、毎年の収入を安定させよう

と政府は国への税金を米ではなくお金で納めるよう仕組みを変えました。お金で集めれば、毎年同じ額の税金を集められるからです。

当時の農村には、自分で農地を持っている自作農と、自作農から借りた農地で農業をする小作農がいました。明治時代の税金は土地に対してかけられたので、小作農が耕す土地の税金は土地を所有する自作農の地主が納めました。

小作農は、もともと自分で農地を持っていないほど貧しく、お金を得るためには、自分で作った米を売らなければなりません。しかし地主は、自分の収入を大きくしようと、お金を持たない小作農から、国に支払う税金以上の値うちの米を取り立てました。小作農が生活するためには、残った少しの米を売ってお金にするしかなく、食べるための米はほとんど残らなかったのです。

このようにして、明治～昭和時代前半には、農村での貧富の差がどんどん広がっていきました。この仕組みは、太平洋戦争が終わるまで続いています。【Z会・河原井彩】

今回の教訓
大きな仕組みが変わると、どこかにひずみが出る場合があります。よくなった面だけでなく、悪くなる面がないか、考えるようにしましょう。



河原井彩さん 2007年にZ会に入社。大学受験用の日本史、政治・経済の教材編集を経て、現在は6～8歳向けデジタル通信教育「デジタルZ」を担当。新潟県生まれの埼玉県育ち。